

「おじいさんのすること間違はない」



或るところにおじいさんがあって、そして一匹の立派な遅い馬を持っていらっしやったのですね。何十万円もするような立派な競馬用の馬ですが、その馬を市場へ持って往って金を拵えたいというので、売りに往ったのであります。その途中で、向うから一人の博労が乳房の脹れた牝牛を連れて来るのです。そして、

「その馬とこの牛を交換してくれませんか。この牛はこんなにお乳が出るのです。馬はどんなに立派でもお乳が出ませんからね。この牛は牛乳が沢山採れていいですよ」おじいさんは、成る程と思って、その牝牛と、自分の遅い馬と換えてやったのであります。おじいさんはこの



牛は乳が出るから馬より好いと考えて喜びながら牛を連れて歩いていきますと、今度は一人の羊飼が向うから山羊を連れて来るのです。そして山羊を連れて来た羊飼は言いました。

「あなたの牝牛とこの山羊と取りかえてくれませんか。牛にもお乳が出ますけれども、山羊は一層よいお乳が出ます。山羊のお乳というものは牛のお乳よりも消化がよくて滋養になります。紙屑を食べさせておいても、それがお乳になるのですから大変いいですよ。だからこの山羊をあなたの牝牛と換えてあげましょう」

おじいさんは、羊飼のその話にうかうかと乗って、牝

牛を羊飼に渡して、自分は山羊を貰って、此の山羊はよいお乳が出るなど思つて喜んで歩いていますと向うから鶏を連れてくる男が来たのです。そして、

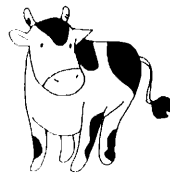
「この鶏を山羊と交換してくれませんか。山羊は卵を産みませんが、鶏は卵を産みますから、山羊よりも鶏の方がいいですよ。」

「じゃあ、交換してあげましょう。」

というわけで、おじいさんは山羊をその男に渡しまして鶏を抱えて歩いてきますと、向うから腐った林檎を袋に入れて担いで来る男があります。

「おじいさん、あなたの鶏とこの林檎を取換えてくれませんか。鶏は餌の世話をしなければならんけれども、この林檎は腐ったりと雖も林檎ですから、餌をやる世話はなし、腐った部分を取去れば其の儘たべられるんですからな。」と言いました。

おじいさんは、最初自分の家から連れ出した立派な馬を到頭そんな腐った林檎に取換えましたので、もう市場に行つても売れないものですから帰ろうというので、自分の家の方へ向つて歩いていますと、後から「モシモ



シ」という人がある。振返ると立派な風をした大地主の旦那です。そして、

「君は、あんな立派な馬を連れて来て、とうとうそんな腐った林檎と取換えてしまっただろう、家に帰ればおばあさんに叱られるよ。」と申しました。

すると、おじいさんは、

「自家のおばあさんは好いおばあさんで、わしが何をしても、おじいさんのすることに間違はない」といいますよ」と答えます。

「そんな馬鹿なことがあるものか。それはちよつと位の間違なら、そういうかも知れないけれども、こんな何十万円もする馬を腐った林檎と取換えたりしたら、おばあさんは屹度、腹を立てて叱りますよ。」と地主は言います。

「いいえ、うちのばあさんは、やさしいばあさんですから、きつとおじいさんのすることに間違はないというにきまつています。」とおじいさんはいうのです。

「そんな莫迦なことはない。若しおばあさんが、そんなことを言うようであつたら、私の持っている地面をみん

なお前にやってしまふよ。それなら賭けをしよう。」

こう地主は言つて、おじいさんと一緒に連れ立って帰つて来ました。

「ばあさんよ、今帰つたよ」と言つと、ばあさんは、

「あの馬はいい値段で売れたでしょうね。」

「いや、実はおばあさん、あの馬を連れて行つておつたら向うから牝牛を連れて来た男が来て、牝牛と馬とかえてくれと言ふからそれと換えてやつたよ。」

「おじいさんのすることに間違はない。牝牛と取換へなかつたら、牝牛はお乳が出るから、それはよかつたですね。」といつておばあさんは喜ぶのです。

「いや、ところが牝牛も、向うから山羊やまがひを連れて来た人があつたので、その山羊と取換えてやつたのだよ。」

「そうですか。本当におじいさんのすることに間違はない。山羊のお乳は牛乳よりも、非常に消化が好いですから、こんな結構な事はない」と、おばあさんは又大喜びです。

「ところが、その山羊も今はないんだよ。その山羊を連れて行つておつたら向うから一人の男が鶏を連れて来た



よ。そしてその鶏と取換えてくれと言ふから取換えてやつたのだよ。」

「そうですか。それは善いことをなさいました。山羊は卵を生まないけれど、鶏は卵を産んでくれるから、おじいさんのすることに間違はない。」とおばあさんはいうのです。

「ところがその鶏も、実は向うから腐つた林檎を一籠担いで来てその鶏と取換えてくれというから、とうとうその鶏をやつて、腐つた林檎を持つて帰つたよ。」

とおじいさんは言いました。

大地主は今度こそおばあさんが怒るかと思つて見ていると、

「本当におじいさんのすることに間違はない。」

とおばあさんはいうのです。

「今しがた近所の貧しい憐れな人が来て、食べ物がなく困つて居るから何か恵んでくれというから、戸棚をさがして見ても何もないから、何かあなたに差上げたいと思ふけれども、どこ探しても腐つた林檎一つないわいなと答えて帰したところちやうどです。恰度其処へ腐つた林檎をあ

あなたが持つて帰つて下さった。全くこれは誑えたような
ものですよ。矢張りおじいさんのすることに間違はない。
い。どれこれから隣りの人にこの腐った林檎を持つて
往つてやりましょう。」

斯ういつて、その林檎をもつて出かけて行きました。

大地主はびっくりしましたがとうとう賭に負けて、自
分の地面をすっかりおじいさんにやったので、おじいさ
んは一ぺんに、大地主になつたといふのであります。聖
書の「山上の垂訓」には「幸福なるかな、柔和なる者。
その人は地を嗣がんとあります、心が柔和で良人の
言うことに少しも逆らわない者は斯うして地を嗣ぐ様
なり、結局、最後は一等よい事になるのに間違はなかつ
たのであります。

ところが、最後に達するまでの道中はだんだん状態が
悪くなるものがあります。名馬が牛になり、牛が山
羊になり、山羊が鶏になり、鶏が腐った林檎にまでなつ
た。そのように、だんだん途中は悪くなつても「おじい
さんのすることに間違はない」と最後まで信じています
と、結局、「柔和なる者は地を嗣ぐ」ことになるのであ



ります。

※

こんな話を致しますと、男女の基本人権が平等な
に、男性の主人ばかり自分の意見を主張して、女性に
ばかり絶対無我になつて従えなどと云うのは極端な封
建思想だと思われるであります。封建時代でも、
民主主義時代でも真理は決して変らないので、女性が
素直に男性の要求を入れてやることによつてのみ、子
を生むことが出来るような肉体の生理的構造になつて
いることが、封建時代も民主主義時代も変らないのと
同じように、これは永久に変わることをなき真理なので
あります。

無論、民主主義憲法の下で、民主主義法律に女権を主
張することは出来ます。そして夫よりも立派な仕事を社
会的にやり遂げることも出来ます。併しひとたび、夫と
の対人関係になりますと、妻が絶対素直に夫に従う人
でない限りは、夫との家庭生活も不幸でありますし、妻も
不幸であります。(中略)妻は先ず「無」になつて柔か
く優しく素直に夫にそうとき真に妻としての幸福が得ら